

北壁に舞う

長谷川恒男

北壁に舞う
長谷川恒男

集英社

北壁に舞う

一九七九年五月三〇日第一刷発行

定 価 一三〇〇円

著 者 長谷川恒男

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋一丁五十一〇

電話 出版部(〇三)二三〇一六三六一

販売部(〇三)二三八一二七八一

印刷所 大日本印刷株式会社

©T. HASEGAWA, Printed in Japan, 1979
0095-772196-3041

検印廃止。落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

北壁に舞う

目次

1 レシヨ小屋

自分を岩壁に写してみると、
いまの心境が見えてくる。

5

2 レビユファ・クラック

すべてのことが危険であり、
すべてのものが困難である。

21

3 振り子トラバース

人間の肉体は大変おもしろい。
もうダメだと思っても必ず回復してくる。

39

4 灰色のツルム

山に登らない人と話ができないなら、
アルピニストとして何かが欠けている。

51

5 孤独

ひとつの苦しい経験があれば、
それ以下の苦痛には耐えられる。

65

6 三角雪田

ずっと星を見ていると、
星のむこうは何かな、とふと思う。

73

7 歯車

隊長が悪い、リーダーが悪いとよく言う。
山とは関係のない話だ。

87

8 褐色のツルム

友が遭難したら、まず手をさしのべる。
嘆き悲しんで、オロオロする前に。

93

9 ウォーカー・ピーク

私のように臆病な青年が、もしたったひとり
よじっていたら支えてやろう、
私が死んでも。

105

ブック・デザイン／鶴本正三＋ツルモトルム
日本音楽著作権協会許諾 第七九〇一八〇九号

1

レシヨ小屋

自分を岩壁に写してみると、

いまの心境が見えてくる。



暗い。

それはまるで夜の沼のように静かで、それでいて何かが底の方でゆっくりと動き出しているような感じだった。

取り残されているような気がした。かといって、特に焦りはまったくくない。いわば、身体中の腺という腺がだらしなくゆるんでしまったような状態だった。

通りかかる人もいない。時折、荷物を運ぶ人たちの声が天井にはね返って、鼓膜を刺激するだけだった。

「長谷川さん、長谷川さん、やっと荷物が出きましたよ」

スタッフのひとりに声をかけられ、私はようやく、坐っていたシャルル・ドゴール空港の小さな椅子から立ちあがった。

私たちは、まだ空港内の機能が完全に開始されない朝六時、フランスに入国した。本来なら、フライトを教えるカン高いアナウンスや、再会を喜びあう人々の歓声で賑わうこの空港内も、今日に限って異常なほど静かだった。

こんなではなかったと思った。

マッターホルンに登った時も、アイガーの時も、ひとりで空港に降り立ったのにもかかわらず、も

っと楽しげに私を迎えてくれたのだった。しかも今度は映画のスタッフも含めて大人数だ。暗いわけはない、取り残されるわけはなかった。もっと愉快にスタートしていいはずなのに、何故か、全身に鉛がしみこんだように指先一本一本まで弛緩していた。

何故だろうと考えても、脳はまるで回転しなかった。どんよりした北国の冬空のように脳の中を雲がおおい、何ひとつ浮かぶものはなかった。

「長谷川さん。荷物が……」

荷物などどうでもよかった。

何故だろうと思えば思うほど、目に見えるものひとつひとつが暗くなっていった。ようやく自分の荷物をカウンタ―から引きあげ、迎えの車にのつても、頭の中の雲は消えることはなかった。

グランドジョラス北壁の冬期単独初登はんへの第一歩は、こうしてはじまった。ちょうど、沈んだ淵がゆつくりと動き出し、やっと川となつて流れ出すように。

シャモニーへ向かう間、素晴らしい快晴だった。一般の人なら天気がよいのは非常にうれしいことなのに、私にとっては、この日の快晴は憎らしかった。ヨーロッパ・アルプスの冬はふつう天気が悪く、晴天が長期的に続くなどということはひと冬一回か二回、それもまさにあるかないかという状態である。しかも、出発する前に現地から帰ってきた人の情報によると、それが一回あったというから、もう、あと一回あればいい方だった。

いまがもしかしたら、その最後のチャンスかもしれない、と思いはじめるとシャモニーへ向かう電車にのつていても、私の心は激しくゆれ動いた。チャンスは絶対のがしてはいけない。野球でいえばホームラン・ボールは一回のバッターボックスで必ずくるとはいえないからだ。しかし、野球なら相手も人間。登山の場合は相手は天気で、自然である。しかも、シャモニー地方の自然にとっては、私

は突然訪れた新参者だ。周期があるといっても、いまがどの周期の、どのあたりなのか私にはさっぱりわからないのだ。今日の快晴が、ひと冬に二度あるかないかの七日間の快晴の最後の日だったら、もう二度とそのチャンスはない。

私のイラだけは、シャモニー行きの電車の窓に映る美しい雪景色とは別に、心を徐々に圧迫していた。早く荷物を整理したいし、荷上げも完了したい。しかも、頭の中は相変わらず雲でおおわれている。私の精神状態はひと口で言いあらわせないほどゆれ動いていた。

シャモニーについた翌日、天気が悪かった。朝三時頃、ハツと目を覚まして、ペンションの窓から外を見ると、小雪が激しく風に舞っていた。窓枠をささえていた両腕が安堵感のためガクッと折れ、ホツとした大きなため息が思わず口から出てしまった。

人間、身体だけでは何もできないことはよくわかっていても、登るという行為を外部に示すのは身体だ。それに、身体を支える心の準備、さらには身体に指令を出す緻密な頭脳の好調な持続が必要だとはいっても、身体そのものが健康であれば、何かに敢然と向かっていけるとどうしても思ってしまう。

私は以前から、敢然と向かっていくのは、健康な身体だけではなくて、精神であり、明晰な頭脳だと思っていたのにもかかわらず、このありさまであったから、吹きすさぶ白い雪景色は、まさに救いの神であった。

よかった、昨日の快晴はとりあえず、快晴が続く初日ではなかった、と思った。だが、昨日までの快晴の連続で、今日から崩れるという日に来てしまったのかもしれない。でも、それは聞いてみればわかることだし、新聞の天気図を見ても、そうでないことは明白であった。

これでシャモニーの天気図の周期の中にすっぽりと入りこめた、と思うとゆっくり就寝することができた。

翌朝から雲が立ちこめ、一日中日がささない天候が続いたので心おきなく準備をはじめることができた。まず買い物に出かけた。私はスロー・スターターだから、買い物もいっぺんにできないクセがあった。ふつうの人なら買い物メモを持って、いっぺんにお店をまわって買い集めてしまうのだろうが、私にはそれがどうしてもできなかった。

スキーをまず買いに行けば、それだけ買ってペンションに戻ってくる。そして、またスキーシールを買いに行くといった具合であった。何も急ぐことはない、準備というものはひとつひとついいねいにやることだ。準備をやりながら山を考え、山を考えて準備をするといった繰り返し、いつの間にかクセになってしまったのだろう。しかも、天気が悪い。シャモニーの天気周期をつかまえた自信は、準備期間に、装備の手直し、買い足しの時間などを十分私に与えてくれたようであった。

「スキーに行こうよ」

私は妻の満子に声をかけた。

グランドジョラスに登るためには、スキーは絶対必要な技術のひとつだった。だが私はほんの三カ月ほど前まではまったく滑れなかった。

アイガーの登はんを終えて下山した時、私は妻にこう言ったそうだ。

「もう単独登はんはやめた！ もうやめたよ」と。

しかし翌日ケロッとした顔で「スキーをやらなけりゃ取りつきへ行くのが大変だな」と再び妻に言った時、もう私の心はグランドジョラスに向いていたのだと、妻はいまも笑いながら言う。何しろグランドジョラスだけは山スキーができなければ取りつきまで行くのが大変な労働であり、危険である。これで私にとって新しいもうひとつの技術の習得が必要になったのである。

昨年暮、私はひとりで信州の岩岳へ山スキーを習いにいった。出発する一カ月前のことである。

連日コーチ役の降旗さんの特訓を受けたというと格好がいいが、このコーチ、昼も夜も山の話ばかり。

私に逆に山の話質問しては喜んでいた。もともと、スキーをはいて山の中を歩きながらだから、降簇さんの本当の狙いはそこにあったのかもしれない。特訓というと悲壮なイメージが浮かぶが私は彼のおかげで、とても楽しい特訓を受けさせてもらったような気がする。

だから私のスキーは間違いなく華麗ではない。ボーゲンにしても、おっとっと……といったスキーだ。しかし、絶対に転倒することはなかった。転倒しそうになっても、片足で滑っていった。

技術というものは身体のフィーリングから生まれると思う。私のスキーは私の腰のバネ、それに鍛えぬいた足のフィーリングだけで生み出した技術だから、私にはとても似合うような感じがした。しかし、グランドジョラスで待ちかまえているのは、あのレシヨ氷河だ。ただ単にフィーリングだけでは、さすがにダメだと思い、シャモニーについたら、もう一度特訓してみようと思ったのだった。幸いにして、妻はスキーが上手だった。それで思わず声をかけてみたのだった。

このスキー行きには、特訓のほかにもうひとつ目的があった。

それは空港について以来の、頭の中の雲をとりはらうことであつた。少しずつ消えかかってはいるけれど、まだ存在していることは確かだった。もう、何故だろうと考えることはとくにやめることにしていたから、そんなに気にはしていなかったが、白いグレンデで汗を流すことによってその存在を忘れることができた、と思ったのだった。

妻とのスキーは楽しかった。何もかも忘れて、久しぶりの心の余裕が生まれた。白くまぶしい雪が私の焦りを完全に洗い流してくれた。自分が登ろうと思うからいけないんだ。機嫌がいい時に登らせてもらうんだ。いつもの口グセがふっと口から出そうになった。

そうだ、それを忘れていた。天気についても、自分ではどうしようもないことであつてそれに負けてしまうようでは、グランドジョラスに笑われてしまう。ものごとは第一、楽しくなければできない性格の私が、無理にしかめっ面をして、深刻に考えても似合わないわけだ。

「何考えてるの？」

「君のこと」

「馬鹿みたいー」

ふたりで大声で笑いながら、少しずつ、身体も精神もグラウンドジョラス北壁へと向かっていくのを全身で感じはじめていた。

山は何にもしない。登れないというのは、人間が自分に負けたことにすぎない。

私がそう思い出したのはいつの頃だっただろうか。十五歳の時、丹沢へ兄に連れられて行き山歩きした時はそんなことは考えも及ばなかった。川のせせらぎが気になり寝られない、ご飯もこれというまくな。蝶がたくさん舞っているのがきれいだと思つた程度だったから。

高校時代だっただろうか。定時制だったから、働きながら学校へ通い、柔道部に入り、さらに休みの日には山に登った。その時かもしれない。武道家になりたいと夢みつつ、一対一の勝負で自分の技を競う柔道に、何にも負けない魅力を感じていた私が、ある瞬間、もつとつきつめた勝負は何だろうと考えた、その時がきっかけかもしれないと思う。

この気持をさらに増大するような事件が、まだ十七歳だった私の目の前で起きた。

会社のパーティーで谷川岳一ノ倉沢南稜を登はん中、先行していた先輩のバートナーが、音もなく落下してきた。何かの気配に上を見上げた時、大きなかたまりが頭上を通過し、足元で大きくバウンドして、下のハンクに宙吊りになった。断末魔を思わせる叫び声が、一ノ倉沢の谷に響き、私は恐怖に足がすくんでしまった。だが、先輩の指示に従い、夢中で行動した。警備隊へ事故を知らせ、現場に戻ると、

「長谷川ー 背負って降りろ」とリーダーの指示。

私は、みんなの持っているありったけの握り飯を食べると、けが人を背中にかつぎあげ、岩場を降りはじめた。登るのにも大変な岩壁である。必死の思いであった。

雨のしとしと降る中を下降していくうち、事故を知って岩場を下降してきた人が次々と合流して、誰かが私と替わってくれた。しかし、それが誰だったか覚えていない。数年後知ったのだが、今はガイド仲間の桜井正己さんのグループであった。ただ断末魔のような叫び声をあげ暴れる負傷者の、手足を押さえていた記憶はしっかりと残っている。そして、その人は死んだ。先輩に抱かれて。

私はまだ本格的な岩登りをはじめて一年たらずで、山の厳しい現実を経験したのだった。ふり仰ぐ一ノ倉沢の壁は何事もなかったように悠然とそびえたっていた。

「何もしていないよ」

山はすまなそうな顔ひとつせず、そう語りかけているように私には見えた。

「今に見ている」

壁にむかって、キラキラ光った両眼でそういつて谷川岳を後にした。

とことん勝負してやろう、命のやりとりだ。いま考えてみると大変恥かしいが、いわば人生の勝負を壁に賭けてみようと思ったのは、この時がはじめだといってよいだろう。

そこにはもはやスポーツの精神はなく、岩登りというものを武道としてとらえ、真剣勝負あるのみと思い込むほどの強烈な感性が生まれたのだった。

それには、いや、山との勝負に勝つには、自分の技術を磨かなければならない。そう思うと、私は絶対にトップで登れる技術、精神力、体力を身につけなければならないと思った。

よじれるか、転落するか、徹底的に勝負してみたかったのだ。そして、みごとに私は、自然に負けてしまった。転落したのである。前記の事故があつてから三カ月後、烏帽子の奥壁中央カンテでのとだ。友人とふたりで登はん中、自己のおごりから何でもないとこで、私は転落してしまった。岩

肌がサツと流れ、一回転して白い霧が目の前をおおった。三十メートルの転落だった。全身を岩壁に叩きつけられたが、大きなケガはなかった。だが精神的なダメージは大きかった。それに追いうちをかけるように、あたりはガスがおおい、雨さえしとしと降り出してくる。だが、再び私は起きあがった。いま考えてみても恐ろしいほど激しい闘志だった。

トツを替わるといふ友人をふりきって、敢然と再びよじりはじめた。すりむいた傷あとから血がしつように肌をなめはじめ、自分の負けを早く認めさせたがっているように感じた。

もしここで私がトツを譲ったら、私は一生、自然に負け、山への恐怖感に残るだろうと咄嗟に判断した。そして、なぜ自分が落ちたかわからないまま人生を終えてしまうのは非常に残念なことのように思えてならなかった。ついに、登はんは終了した。しかし、喜びはなかった。転落で時間を食ったために、あたりは真っ暗。下山することもできなかったからだ。雨も激しく降ってきた。ひどく暗く寒い夜であった。私たちは、キャラメルをひとつずつ分けあい、九月の冷雨の中、はじめてのビバークを経験したのであった。

レシヨ小屋への荷上げがはじまった。私は自分の荷物を背負って雪の中を歩きはじめた。いつのまにかスタッフやサポートたちは、私に追いつけないと思ったのか、シャモニーへ引き返していつてしまった。

私はまったくひとりになった。一步一步、雪をふみしめるようにレシヨ小屋へ向かった。背中三十キロの荷物も苦にならないほどスツキリした気持で、レシヨ氷河に入っていた。そして、モンタネールの駅を過ぎた頃グランドジョラスがちょっと頭を出した。もつと見えるところ、もつとよく姿が見えるところへと私は進んでいった。そして一番よく見える地点まで来ると、そこに坐りこんだ。頭の中の雲は消えていた。ひとりになった荷上げの途中から、みごとになくなっていった。グランド